CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

吉備国際大学研究紀要（保健科学部） 第20号，51～56，2010

本学科学生の自我構造と基本的構えの１・４年次の経時的変化について

松田　勇　小林隆司　香田康年

A periodical study of ego-state and basic positions at first / fourth year students in the department of occupational therapy

Isamu MATSUDA，Ryuji KOBAYASHI，Yasutoshi KOUDA

要　旨

本研究の目的は同一学生を対象に１年次と４年次の自我構造と基本的構えの状態およびその変化を捉え検討することである。方法はエゴグラムを用いて現在および理想と考える自己の自我状態を、さらにOK グラムを用いて自己および他者に対する基本的構えを調査した。結果は以下の通りである。１．エゴグラムでは１・４年次とも「現在の自己」に比して「理想の自己」は CP、NP、A で有意に低く、FC と AC では有意に高かった。２．エゴグラムの１・４年次の変化では A と FC で最も強い相関を示し、AC は弱い相関に留まった。３．OK グラムでは他者否定尺度の得点が他の３尺度より有意に低かった。４．OK グラムの変化では１年次に比して４年次で他者肯定尺度が有意に高くなり、自己肯定尺度が有意に低くなった。さらにこれらの指標を基に学生へのより個別的な対応の必要性が示唆された。

キーワード：作業療法学生、エゴグラム、OK グラム、基本的構え

Key words：occupational therapy students，ego-gram，OKgram，basic positions

はじめに

多くの学生は高校を卒業した後、現役生として本学科に入学してくる。大学の４年間は学生にとって新たな専門性を身につけ、また自己成長のための貴重な４年間と言える。そのような過程の中で学生の自我構造がどのように変化し、また対人関係の基礎となる基本的構え（basic positions）がどのように変化するかを把握することは将来の医療人としての基礎教育に重要と考えられる。本研究では同一学生を対象に１年次と４年次の自我構造と基本的構えの状態およびその変化を捉え検討すること目的とした。

自我構造の把握にはエゴグラム（egogram）を用いた。エゴグラムとは Eric Berne（1954）により創案された交流分析（TA；Transactional Analysis）の手法を基礎とし、Dusay J. M. により自我の状態をより定量的・構造的に捉える方法として考案されたものである。その後、Heyer N. R. により質問紙法としてのエゴグラムが開発され今日に至っている[1)]。精神分析では人の心理を超自我・自我・イドの領域に分け無意識下の心理状態を強調しているが、交流分析では個人の自我の状態を「親（P；Parent）・大人（A；Adult）・子供（C；Child）」の状態として捉え、無意識の心理状態は強調しない。さらに、親の自我状態は批判的親（CP；critical Parent）と保護的親（NP；Nurturing Parent）に、子供の自我状態は自然な子供（FC；Free Child）と順応した子供（AC；Adapted Child）に分けられる。エゴグラムはこれらの状態をカテゴリー化し質問項目に答えるように調査される。本邦では九州大学心療内科の池見、杉田により 1974 年に導入された。その後、諸家により質問紙法として多くの考案がなされ、現在、臨床応用などの研究も盛んに行われている[2-9)]。

吉備国際大学保健科学部作業療法学科
〒716－8508　岡山県高梁市伊賀町８

Department of Occupational Therapy, School of Health Science, KIBI International University
8, Iga-machi, Takahashi-City, Okayama, Japan, 716-8508

基本的構えの把握にはOKグラムを用いた。OKグラムとはエゴグラム同様に交流分析の理論を基に考案されたものである。自己および他者に対する心の「基本的構え」（basic positions）を自己肯定（I am OK）・自己否定（I am not OK）・他者肯定（You are OK）・他者否定（You are not OK）で４象限化し、その４つのカテゴリーから構成された質問紙法である[1)]。

対　象

対象は本学の某年度に入学した作業療法学科の学生45名である。調査は１年次の４月と４年次の８月に実施した。なお、本調査においては学生に十分な説明を行い、研究以外の目的でデータを一切使用しないこととし同意を得た。さらに、個人が同定される名前等の記載は任意とした。

方　法

１．今回の研究で使用したエゴグラム質問紙は岩井ら[9)]が考案したもので自我の各側面であるCP、NP、A、FC、ACに対してそれぞれ10項目の質問で合計50項目の質問紙として構成されている。各質問項目の例は以下の通りである。CP；「人の言葉をさえぎって、自分の考えを述べることがありますか」NP；「他人に対して思いやりの気持ちが強い方ですか」A;「自分の損得を考えて行動する方ですか」FC；「自分をわがままだと思いますか」AC；「思っていることを口に出せない性質ですか」また各質問項目はそれぞれ「はい」を２点、「いいえ」を０点、「どちらでもない」を１点とし採点し各カテゴリーは20点満点で算出される。

今回の調査では学生の自我状態について以下の２つの条件を設定し実施した。

１）「現在の自己」；学生の現在の自我状態による自己イメージで答えさせる。

２）「理想の自己」；将来の専門職である作業療法士として各自が描く理想とする専門職イメージとして答えさせる。

２．OKグラムは心の「基本的構え」（図１）を評定するもので、今回の調査では杉田[1)]の考案した質問紙を用いた。本質問紙は自己肯定尺度、自己否定尺度、他者肯定尺度、他者否定尺度からなり、それぞれ10項目の質問で構成されている。各質問項目の例は以下の通りである。自己肯定尺度；私は自分自身が好きである。自己否定尺度；私は皆から好かれる人間ではない。他者肯定尺度；他の人のやり方や考え方が自分と違っていても特にイヤな気持にならない。他者否定尺度；私は根本的には人間を信用していない。また採点はエゴグラム同様、「はい」２点、「いいえ」０点、「どちらでもない」１点とし、各カテゴリーはそれぞれ20点満点で算出される。

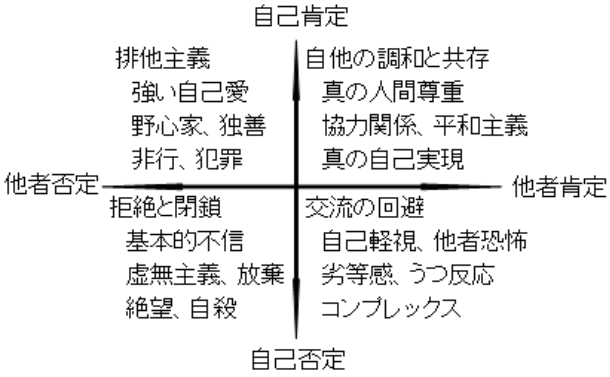

図１　基本的構え

３．統計処理はystat2006.xlsを使用した。今回のデータはすべてノンパラメトリックな変数であり正規性の適合はχ^2 test、対応のある２変数はWilcoxon t-test、対応のない２変数はMann-Whitney U-testを用いて有意性の検定をおこなった。２変数間の相関性はスピアマンの順位和相関係数を用いた。

結　果

１．エゴグラム・パターンについて

調査学生全体のエゴグラムの各カテゴリー別に１年次と４年次の現在の自己と理想の自己の平均値と標準誤差を表１に示し、エゴグラム・パターンを図２に示した。CPとFCでは１年次の現在の自己と４年次の現在の自己および１年次の理想の自己と４年次の理想の自己で有意な差は認められなかった。NPでは１年次の理想の自己と４年次の理想の自己でのみ有意差は認められなかった。一方、その他の自己像間のすべてで有意な差が示された。すなわち、理想の自己ではCPとNPとAで１年次・４年

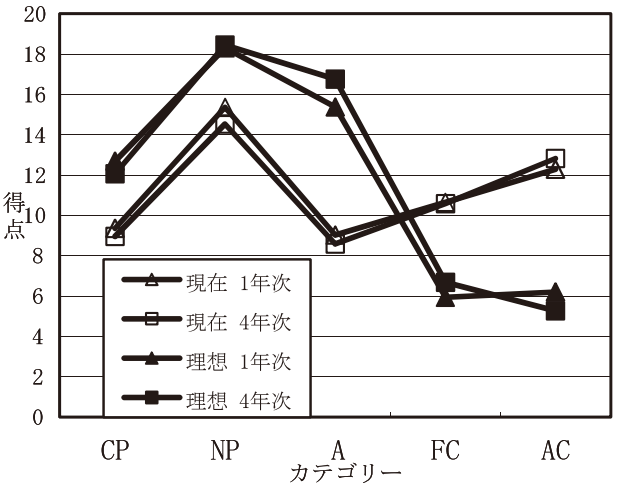

図２　各年次の現在と理想の自己の全体のエゴグラム・パターン

次ともに現在の自己の比して有意に高く、逆に FC と AC では有意に低かった。現在の自己の１年次と４年次の比較では NP と A で１年次の方が有意に高く、逆に AC では有意に低かった。理想の自己の１年次と４年次の比較では A でのみ４年次の方が有意に高く、逆に AC では有意に低かった。

表１　エゴグラム・各カテゴリー間と各年次間の比較

			平均値	標準誤差	１年次 理想の自己	４年次 現在の自己	４年次 理想の自己
CP	１年次	現在の自己	9.36	0.50	**	ns	**
		理想の自己	12.69	0.36		**	ns
	４年次	現在の自己	8.96	0.54			**
		理想の自己	12.07	0.35			
NP	１年次	現在の自己	15.36	0.44	**	**	**
		理想の自己	18.31	0.17		**	ns
	４年次	現在の自己	14.53	0.47			**
		理想の自己	18.44	0.17			
A	１年次	現在の自己	9.02	0.48	**	*	**
		理想の自己	15.38	0.38		**	**
	４年次	現在の自己	8.58	0.48			**
		理想の自己	16.76	0.25			
FC	１年次	現在の自己	10.64	0.58	**	ns	**
		理想の自己	5.93	0.40		**	ns
	４年次	現在の自己	10.58	0.60			**
		理想の自己	6.69	0.43			
AC	１年次	現在の自己	12.29	0.57	**	*	**
		理想の自己	6.20	0.46		**	**
	４年次	現在の自己	12.82	0.67			**
		理想の自己	5.27	0.45			

Wilcoxon t-test　ns：P>0.05　＊P<0.05　＊＊P<0.01

２．各エゴグラム・カテゴリーの変化について

現在の自己について各カテゴリー別に表１のデータを基に４年次の平均得点より１年次の平均得点を減じた点数で算出した結果では CP で－0.40、NP で－0.82、A で－0.44、FC で－0.07、AC で＋0.53 であった。また、各学生の１年次と４年次の得点分布およびその相関を図３～７に示す。図中の対角線の上方が１年次より４年次の得点が高くなった学生であり、下方は逆に得点が低くなった学生を現している。相関係数（rs）はそれぞれ CP で 0.63、NP で 0.53、A で 0.71、FC で 0.79、AC で 0.30 であった。

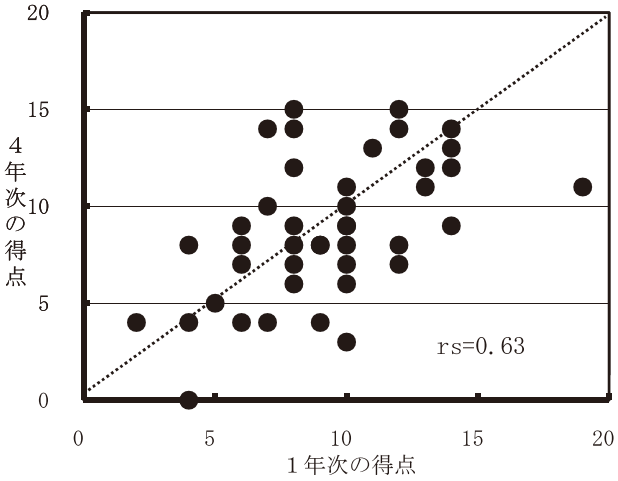

図３　エゴグラム・カテゴリー CP の変化

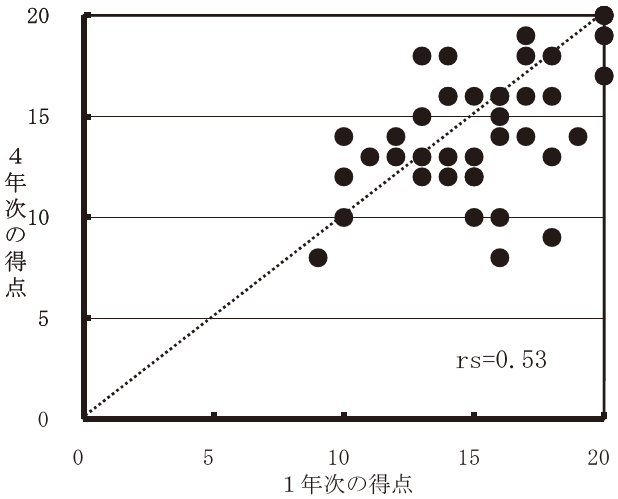

図４　エゴグラムカテゴリー NP の変化

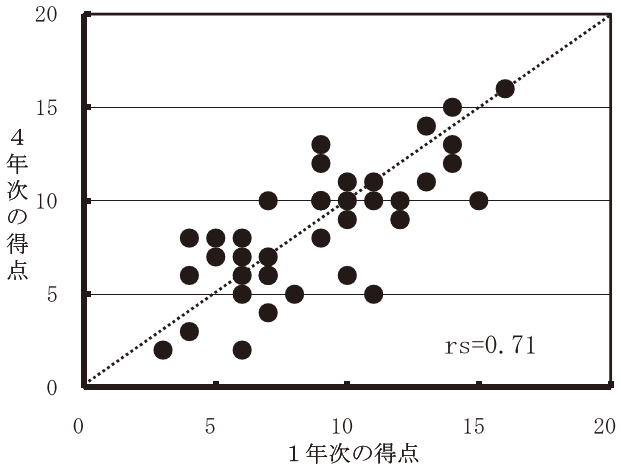

図５　エゴグラムカテゴリー A の変化

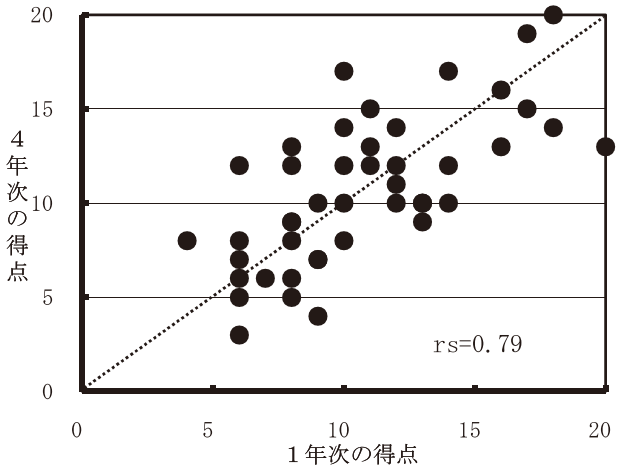

図６　エゴグラムカテゴリー FC の変化

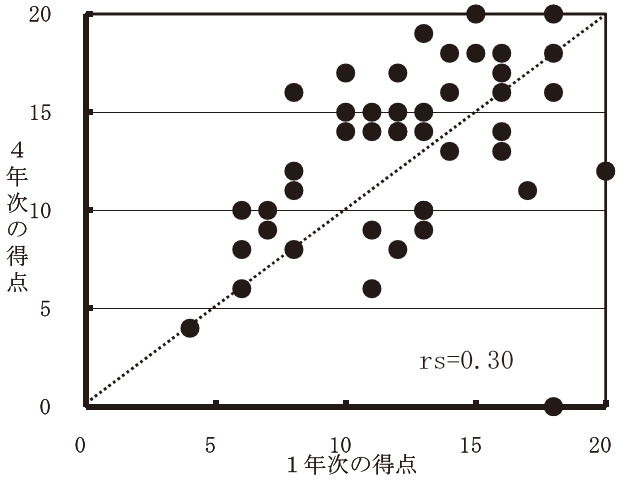

図７　エゴグラムカテゴリー AC の変化

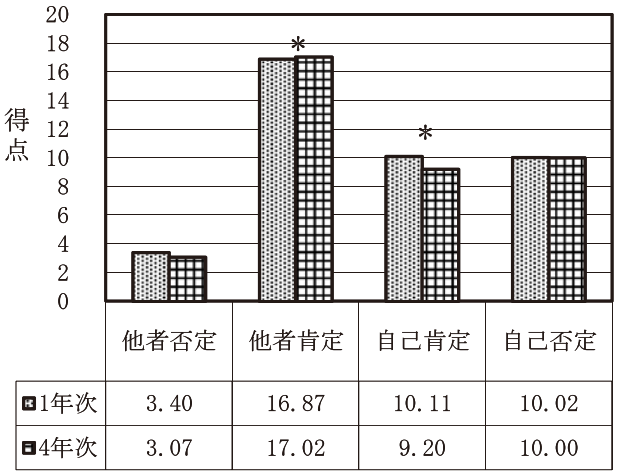

図８　OK グラムの各尺度の平均得点

３．基本的構えの平均得点について

OK グラムの各尺度間ではすべてに有意な差を示した。特に他者否定尺度は他の３尺度に比して極めて低い得点であった（図８）。１年次と４年次の各尺度での平均得点の比較では他者否定尺度と自己否定尺度の平均得点では有意な差は示されなかったが他者肯定では４年次の方が１年次に比して有意に得点が高かった。逆に自己肯定尺度では１年次の方が４年次に比して有意に得点が高かった。

４．基本的構え４象限の分布

OK グラムの他者肯定尺度から他者否定尺度の得点を減じた点数を横軸に、自己肯定尺度から自己否定尺度の得点を減じた点数を縦軸にプロットし、１年次と４年次の分布を図９に示した。図中の左半分

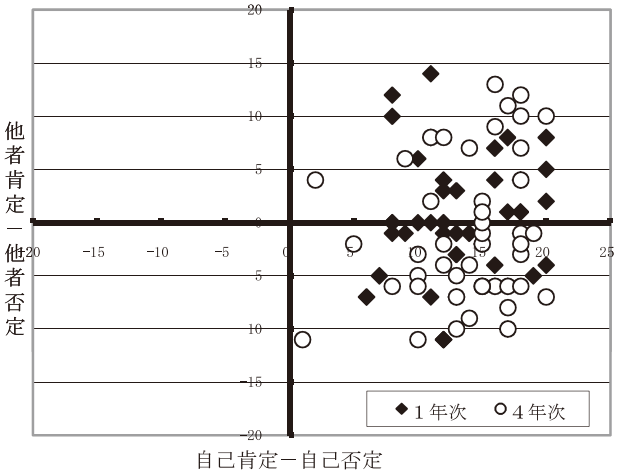

図９　各年次の OK グラムの分布

すなわち他者否定の象限には学生の分布はなかった。一方、縦軸の自己肯定・否定尺度では図中の右半分すなわち自己肯定･他者肯定の象限と自己否定･他者肯定の象限に広く分布した。また、これらの分布に１年次と４年次に有意な差は認められなかった。

５．OK グラムの変化

他者肯定尺度から他者否定尺度の得点を減じた点数を基に４年次の点数から１年次の点数を減じた点数を横軸に、自己肯定尺度から自己否定尺度の得点を減じた点数を基に４年次の点数から１年次の点数を減じた点数を縦軸にプロットし図 10 に示す。図中４象限で右上すなわち自己肯定と他者肯定ともに得点が高くなったか変わらなかった学生が 13 名、右下の自己肯定の得点が低下したが他者肯定の得点が高くなった学生が 10 名、左上の自己肯定の得点が高くなったか変わらなかったが他者肯定の得点が低くなった学生が 10 名、左下の自己肯定と他者肯定ともに得点が低くなった学生が 12 名であった。

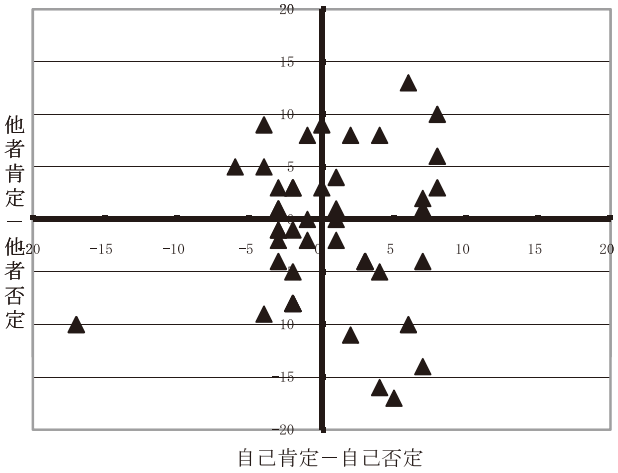

図10　OK グラムの変化（４年次－１年次）

考　　察

学生にとって大学の４年間の生活は多くの知識や技術を学ぶだけではなく、青年期としての自我の成長と対人関係を学ぶ貴重な期間でもある。特に作業療法学科の学生においては臨床実習などを通して実際の患者や利用者に接することで将来の作業療法士としての自己を厳しく見つめ直す経験を積む。そのような経験は学生の自我構造や自己および他者に対する基本的構えに対して大きな影響を与えるであろうことが推測される。

エゴグラム・パターンに見るごとく現在の自己と理想の自己には大きな隔たりが示されている。CP は自己に対する厳しさで NP は他者に対する優しさの特性であるが、どちらも理想の自己に比べ現在の自己が有意に低い状態である。A は論理的思考と冷静な判断力が反映される特性であるが、これも理想の自己に比べ現在の自己が極めて低い状態である。これらは臨床実習など経験することで自己の未熟さが自覚された結果とみることができる。FC は自己中心性につながり AC は周囲への迎合の特性であるとも言える。これらの特性は理想の自己と比べ現在の自己が有意に高い状態にある。すなわち未だ自己の感情や気分に支配されやすく、さらに周囲の状況に従順に従うこと、または流されること示していると考えられた。

エゴグラムの各カテゴリーでの１年次と４年次の個々の学生の相関性は CP と NP で中等度の相関があり、A と FC は強い相関が示された。しかし AC では弱い相関に留まっている。これらのことより学生個々の自我構造の変化は AC で最も強く現われ、A と FC は１年次の特性がそのまま温存されている場合が多いと考えることができよう。

OK グラムでは他者否定尺度が他の尺度より極めて低く、このことは相手を受容する学生の態度が反映されているものと考えられた。作業療法士として患者や利用者と接する上で不可欠な要素と言える。１年次と比して４年次の変化では他者肯定尺度が有意に高くなり、一方では自己肯定尺度が有意に低くなっている。また自己否定尺度には有意な差はなかった。これらのことより学生にとって４年次の実際の臨床を経験することにより患者や利用者を受け入れつつも自己の能力への自信の無さが顕在化された結果とみることもできよう。OK グラムの個々の学生の１年次から４年次への変化は他者否定の領域に移行した者は皆無であった。しかし、自己肯定・他者肯定の方向に移動した者ばかりではなく、自己肯定・他者否定、自己否定・他者肯定、自己否定・他者否定の方向への移動がほぼ均等に見られた。こ

れらのことより臨床実習などの経験が学生個々に与えた影響の多様性をうかがい知ることができると言えよう。

最後にこれらの指標を基に学生へのより個別的な対応の必要性が示唆された。

Abstract

The aim of this study was understanding to change of “ego state” and “basic positions” during the school days at first/fourth year in the occupational therapy students. We investigated by using the egogram and OKgram questionnaires. Results were as the follows ;

1. In the egogram score at the first and fourth year; “ideal self” was significantly lower in CP,NP,A than “current self” and was significantly high in FC and AC.

2. And showed the strongest correlation in A and FC by the change at first/fourth year and AC remained in a weak correlation.

3. The score of “you're not OK” was significantly lower than 3 other scores; “I'm OK” “I'm not OK” “you're OK” in the OK gram.

4. The score of “you're OK” was significantly became higher and “I'm OK” was significantly lowered at the fourth year students.

5. Furthermore, on these indexes was suggested that we need of the correspondence individual to the students.

文　献

1）杉田峰康（2000）医師・ナースのための臨床交流分析入門　第２版．医歯薬出版　東京　p1-86

2）桂載作（2002）医療における効果的なチームコミュニケーション．交流分析研究 27（2）：25-30

3）中川巳子　渋谷百合子（2002）患者と看護師のやりとりの傾向－効果的な相互行為のあり方．成人看護Ⅰ　33：80-82

4）大澤早苗　米村敬子（2005）スタッフ同士に軋轢を生じた人間関係．看護実践の科学 30（3）：32-37

5）岡田俊（2001）精神科看護におけるやりとりの分析－自我状態と臨床経験の影響に関する検討－．交流分析研究 26（1）：68-73

6）志渡晃一　志水幸　宮本雅央　他（2005）本学新入学生の対人関係の基本的構えと自覚的健康状態に関する研究．北海道医療大学看護福祉学部紀要 12：45-51

7）三野節子　金光義弘（2009）大学生の対人関係の基本的構えと精神的健康との関係－交流分析におけるエゴグラムの類型化を通して－．川崎医療福祉学会誌 18（2）481-484

8）新里里春　水野正憲　桂載作　他（1986）交流分析とエゴグラム．チーム医療　東京：p27 p58

9）岩井浩一　石川中　森田百合子　他（1978）質問紙法エゴグラムの研究．心身医 18（3）210-217